

## 1918年11月の革命前夜のエルザス社会民主党 ～エルザス社会民主党の「民族的」分裂～

### Die elsässische Sozialdemokratie am Vorabend der November-Revolution 1918. Die“nationale”Spaltung der elsässischen Sozialdemokratie

加 来 浩\*

KAKU Hiroshi\*

#### 論文要旨

1870/71年の独仏戦争の結果、フランスの一地方エルザスはロートリンゲンとともに、住民の意志に反してドイツに併合された。ドイツ社会民主党は、当初からこの併合に反対し、フランスへの返還を要求した。党は困難な条件下で、勢力の拡大に苦勞したが、その後エルザスを含むドイツ全体の政治的・社会的情勢の変化が、社会民主党のこの地での定着を可能にし、それとともに、エルザスの社会民主党のドイツ的性格が強化され、もはやフランスへの返還は問題外になっていた。そして1914年に第一次世界大戦が勃発した時、社会民主党内部で、ドイツ人とエルザス人の「民族的」対立が表面化した。

キーワード：エルザス，ドイツ社会民主党，民族問題

#### はじめに

1918年11月13日、エルザス Elsaß (Alsace) の首都シュトラスブルク Straßburg (Strasbourg) の大聖堂の尖頭に、革命のシンボルとして赤旗が翻った。それはエルザスが、ドイツの他の地方と同様に、労働者・兵士評議会 (Arbeiter- und Soldatenräte) の支配下にあることを示すものだった。しかしこの状態は長続きしなかった。一週間後の11月20日、最後のドイツ軍部隊がエルザスから撤退し、代わりにフランス軍が進駐してきた。労働者・兵士評議会は解散し(最初に兵士評議会が解散、次に労働者評議会)、大聖堂の赤旗は引き降ろされ、代わりにフランスの三色旗が掲げられた。エルザスの住民の大多数はフランス軍を「解放軍」として熱狂的に歓迎し、かくしてエルザスは劇的な形で1870年以来約半世紀ぶりにフランスに復帰した<sup>(1)</sup>。

このように第一次世界大戦が終結した1918年11月、エルザスはドイツ革命の一環として「ソヴェト」型の革命を経験していた。しかしその期間は他のドイツの諸都市・諸地域(休戦協定により連合軍の占領下に置かれたライン左岸地方を除く)に比べて、きわめて短かく、わずか10日間の「幕合劇」だった。しかし、それにもかかわず、「自治主義」をめぐる世論の分裂で

\* 弘前大学教育学部社会科学科教室

Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

特徴づけられる戦間期エルザスの歴史を考える時、非常に大きな意義を持つことになる諸事件がこの短い時期の間に起こっていた。1918年11月はその後のエルザスの進路を決定していた。

本稿では、このわずか10日間で終わったエルザスの革命において、兵士評議会と並んで主役を演じた社会民主党の役割を明らかにする前提として、1870年のエルザスの併合から1918年の革命の前夜に至るまでの、いわゆるドイツ第二帝政期において、社会民主党がエルザス問題にどのような立場を取ってきたか、言い換えれば、エルザス住民が自決権をどの方向に行使することを要求したか（フランスへの復帰か、ドイツへの残留か、あるいは自前の独立・中立国家の創設か）を、そしてその立場はどのように変化したか、その背景は何であったかを検証しようとするものである<sup>(2)</sup>。

## 注

1. 1918年11月のフランス軍のエルザス進駐は段階的に行われた。エルザスの三大都市では、ミュルハウゼン Mülhausen (Mulhouse) が最も早くて11月17日、次のコルマル Colmar の11月18日、最後にシュトラスブルクが11月22日である。他の中小都市や農村部の町村でも、おおむね似たような、フランス軍部隊に対する熱狂的な歓迎の光景が繰り広げられた。このことから、エルザスの住民がフランスへの復帰を心底から喜んだことは明らかであるが、一般的な解釈、つまり半世紀にわたる「プロイセン・ドイツの軍国主義のくびき」からの解放の喜びという解釈はかなり単純化されており、厳密な正確さを欠くと言わねばならない。エルザス住民のフランス軍への熱狂的歓迎の背景には、半世紀ぶりに「祖国」に復帰できた喜びに交じって、戦争からの解放の喜び、つまり飢餓や耐乏生活からの解放の喜びもあったのではないか。またエルザス人の持つ強い秩序愛好心ゆえに、革命＝「ポリシェヴィズム」の引き起こすかも知れない混乱への恐怖からの解放の喜びではなかったか。さらにフランス軍の歓迎行事に参加したのは、老人、女性、未成年の若者であった。納税者であり有権者でもあった、壮年の男性のほとんどは、ドイツ兵士として戦争に動員され、当時故郷には不在だった。彼らこそが、戦間期のエルザス社会の中核であったことは、その後のいわゆる「エルザスの不満 (malaise alsacien)」や「自治主義」をめぐるフランスとエルザスの対立を考える時に、重要な意味を持つであろう。この点について、Jean-Claude Richez の一連の研究 [“Novembre 1918 en Alsace. Conseils ouvriers et conseils de soldats”, *Cahiers de l'Alsace Rouge*, n° 1, 1977, pp. 1-19; *Conseils ouvriers et conseils de soldats. Revendications de classe et revendications nationales en Alsace en Novembre 1918*, 1979; “La Révolution de Novembre en Alsace dans les petites villes et les campagnes”, *Revue d'Alsace*, n° 107, 1981, pp. 153-168.] を参照せよ。
2. 本稿が対象とする時期のエルザスと社会民主党に関しては、差し当たり以下の文献を参照。Das Elsass 1870-1932, 4 Bde., Colmar 1936 u. 1938; Jacques Peirotes 1869-1935, Strasbourg 1989; Hermann Hiery, *Reichstagswahlen im Reichsland*, Düsseldorf 1986; Susanne Miller/Heinrich Potthoff, *Kleine Geschichte der SPD*, Bonn 1981, S.44; 安世舟『ドイツ社会民主党史序説』御茶の水書房, 1973年。拙稿「ドイツ第二帝政期のエルザス自治運動」(一)(二), 『弘前大学教育学部紀要』第62号・63号, 1989年・1990年。

## 第1章 エルザスの社会民主党

### 第1節 アウトサイダーとしての社会民主党

エルザスはロートリンゲン Lothringen (Lorraine) の一部とともに、1870/71年の独仏戦争（普仏戦争）の結果、ドイツ統一国家たるドイツ帝国 (Das Deutsche Reich) に、いわば戦利品として併合され、帝国領土 (Das Reichsland) として、いずれの邦国 (Bundesstaat) にも属さない、帝国直轄領となった。頂点にはドイツ皇帝兼プロイセン国王が立ち、最初はプロイセ

ンの州 (Provinz) の行政長官として、州知事 (Oberpräsident) が、1879年の憲法以降は、皇帝の代理としての総督 (Statthalter) が任命され、その下に政府が組織された。

後に合同してドイツ社会民主党となる二つの社会主義政党、即ち全ドイツ労働者協会 (ADAV、いわゆるラサール派) と社会民主労働者党 (SDAP、いわゆるアイゼナッハ派) は、この併合に対してどのような態度を取ったか。

ドイツの二つの党に強い影響力を持っていたカール・マルクスの率いる国際労働者協会 (いわゆる第一インタナショナル) の総評議会は既に独仏戦争の最中に、プロイセンを初めとするドイツ諸国のエルザス・ロートリンゲンの領土要求に反対して、マルクスの手になる宣言 (いわゆる第二宣言) を発していた。マルクスは、ドイツ側がエルザスとロートリンゲンの領土要求の根拠として挙げた、両地方がかつてドイツ帝国 (いわゆる第一帝国) に属していたという歴史的事実、南ドイツ諸国の安全保障のために両地方の領有が必要であるという軍事的理由のいずれにも反論した。そして間接的ではあるが、エルザスとロートリンゲンの住民がフランスへの愛国心を持っているがゆえに、両地方はフランスに留まるべきで、ドイツの領土要求には正当性がないと主張した<sup>(1)</sup>。

アイゼナッハ派の執行委員会たるブラウンシュヴァイク委員会も併合に反対の声明を出した。委員会のメンバーは1870年9月9日、逮捕された。1870年11月の第2回戦時公債案に対して、アイゼナッハ派の議員ベーベル August Bebel とリープクネヒト Wilhelm Liebknecht は、戦争が今や「侵略戦争」に転化したとして、反対投票した。二人は「国家反逆」を企てたとして12月に逮捕投獄された<sup>(2)</sup>。獄中であつたベーベルは1871年3月の帝国議会選挙で当選し、議会会期中だけ釈放されて、5月25日、帝国議会で演説し、パリ・コミューンとフランスの労働者に連帯を表明するとともに、住民の意志に反したエルザス・ロートリンゲの併合に激しい言葉を使って反対した<sup>(3)</sup>。このように、後に社会民主党を結成するアイゼナッハ派もラサール派も、エルザスとロートリンゲンのドイツ併合には反対の立場を取った。

1874年、エルザスで併合後最初の帝国議会選挙が行われると、アイゼナハ派は、早速選挙に参加した。この時エルザスで立候補した政党の中で純粋なドイツの政党はアイゼナッハ派ただ一つだった。ベーベルは、シュトラスブルク都市部選挙区及びラポルトツヴァイラー Rappoltsweiler (Ribeauvillé) 選挙区から、リープクネヒトはミュルハウゼン選挙区から立候補した。二人ともエルザス・ロートリンゲンの併合に反対する演説のゆえに禁固刑を受けており、エルザスの利益の擁護者として登場したはずであったが、結果は期待はずれだった。エルザス・ロートリンゲンの15の選挙区で選ばれた15名の議員は、全員いわゆる抗議派 (Protestler) で占められた。アイゼナッハ派は選挙戦で7項目の綱領 [20才以上に選挙権、間接税の廃止、累進課税の導入、無償の学校教育、女性労働の制限、児童労働の禁止、国家と教会の分離] を掲げたが、それらはエルザス問題とは直接関係なく、彼らが全ドイツで掲げた要求と同じだった。ベーベルとリープクネヒトの得票は3つの選挙区で合わせて690票に留まった<sup>(4)</sup>。

アイゼナッハ派とラサール派は1875年5月にゴータの大会で合同して、ドイツ社会主義労働者党 (SAPD、以下、便宜上、社会民主党と表記) を結成し、ここに二つに分かれていたドイツの社会主義運動の統一が成った。ドイツ帝国の「建国の父」とも言うべきビスマルクは、この運動を国家と社会の秩序に対する重大な脅威と受け取り、1878年にはいわゆる社会主義者鎮圧法を可決させ、弾圧を強化した。この社会主義者鎮圧法により、ドイツ全土で社会民主党は活動を厳しく制限され、勢力の拡大は困難だった。しかし、厳しい弾圧の中で、社会民主党は指

導理念としてマルクス主義を受け入れ、急進的な社会主義政党へ変身した。

エルザスではこれに加えて、社会民主党の勢力拡大を困難にするもう一つ別の法律状況が存在した。それはいわゆる「独裁条項」である。独裁条項とは、1871年12月30日の「エルザス・ロートリンゲンの行政に関する法律」の第10条の別名であり、1849年のフランスの法律に由来する。それは「公共安全」にとって脅威が存在すると判断された場合、集会・結社の禁止、危険人物とみなされる者の追放、家宅捜索など、「必要と思われるあらゆる措置」を取る権限を最高行政官（1879年以前は州知事、1879年以降は総督）に与えるものである<sup>(5)</sup>。エルザスとロートリンゲンでは、この独裁条項により、社会主義者鎮圧法を適用しなくとも、「宗教と法律を尊重する住民を社会主義の害毒から予防する」<sup>(6)</sup>ことが可能であった。初代総督のマントイフェル元帥 Edwin von Manteuffel は1881年8月31日、エルザス・ロートリンゲンにおいて社会民主党がドイツの他のどの地方よりも勢力を扶植できないでいることを満足げに皇帝に報告した。

“Die Reichslande (sic!) erfreuen sich, wie Euer Majestät bekannt, des Vorzugs vor anderen deutschen Staaten, daß auf ihrem Boden die Sozialdemokratie bisher nicht gediehen ist. Wiederholt gemachte Versuche, kommunistische und sozialistische Ideen von Frankreich und der Schweiz aus, namentlich in dem Ober-Elsass mit seiner zahlreichen Fabrikbevölkerung [...] zu verbreiten, haben nie einen weitreichenden und bleibenden Erfolg gehabt. Zu Mülhausen besteht ein kleiner Kreis von Personen, welche zur sozialdemokratischen Partei gezählt werden können und sich für die Zwecke dieser Partei bemühen. Die Masse der dortigen Arbeiterbewegung, welche aus geborenen Elsässern besteht, bleibt diesem Treiben fern.”<sup>(7)</sup>

社会主義者鎮圧法は1890年に失効するが、エルザス・ロートリンゲンでは、独裁条項が1902年に撤廃されるまで、社会民主党の集会は、ライン対岸のバーデンやスイスで開かねばならなかった。機関紙も自前の機関紙を発行できず、バーデンの機関紙を利用せざるを得なかった。

さらに社会民主党の活動と勢力の拡大を困難にした経済的・社会的背景として、エルザスではミュルハウゼンの繊維工業を除いて、まだ工業化は進んでおらず、依然産業構造は農業中心であったこと、その結果、近代的労働者階級の形成が遅れ、また労働者の多くが同時に小規模な農地の所有者でもあったこと、エルザスの企業家による家父長的支配が強かったこと、同時に一連の恩恵的な社会福祉施設の整備などによる、ある種の「社会政策」の存在、そしてエルザス住民に特徴的な、権威と秩序に対する崇拜心というメンタリティーの存在が考えられる。また、住民は社会主義を本質的にドイツの思想とみなしていたと言われ、それゆえ社会民主党は1870年からエルザスとロートリンゲンの併合には反対の立場を取っていたにもかかわらず、併合による心の傷の記憶がまだ新しい時期には、反ドイツ感情を持つ広範な住民には受け入れられなかった<sup>(8)</sup>。帝国議会選挙における社会民主党の得票率は、1890年以前について言えば、ほとんど0.1%前後であり、ドイツ全体の6-10%と比べると、いかに勢力の扶植が遅れていたかが明瞭であろう。特にロートリンゲンではほとんどゼロだった<sup>(9)</sup>。社会民主党は、ドイツにおける以上に、エルザスの社会においてアウトサイダー的存在に甘んじなければならなかった。

## 第2節 社会民主党の躍進

社会民主党がドイツ全土で勢力の拡大を始めたのは、ビスマルクが失脚し、社会主義者鎮圧法が失効した1890年以後のことである。別稿<sup>(10)</sup>で明らかにした通り、1890年はエルザスの歴史

の上でも一つの画期を成す年である。この後エルザスでは世代の交代が始まり、併合直後のような親フランス的「抗議」運動はかつてのような広がりを持たなくなっていた。「民族」問題の代わりに「社会」問題が選挙の争点になったことは社会民主党に有利に働いた。1890年の帝国議会選挙で社会民主党は初めてミュルハウゼン選挙区からヒッケル Charles Hickel を当選させることに成功した。ヒッケルは8時間労働の他に、エルザス・ロートリンゲンの住民投票も要求していた。他の選挙区でも社会民主党は票を伸ばした。ペーベルはシュトラスブルク選挙区で当選はできなかったものの約4700票を獲得し、「空白区」だったロートリンゲンのザールゲミュント・フォルバッハ Saargemünd-Forbach 選挙区でケーニヒ König は約4000票を獲得した。社会民主党は次の1893年の帝国議会選挙から飛躍的に得票を伸ばし始めた。この時の得票率は前回の4.9%から一気に14.2%に跳ね上がり、その後は選挙のたびに得票を伸ばした。そして1912年、第一次世界大戦前の最後の帝国議会選挙ではエルザスとロートリンゲンで得票率31.7%、議席5と、全議席の1/3を獲得した。特にエルザスの三大都市にロートリンゲンの県都メッツ Metz を加えた4大都市の5議席は、社会民主党が独占した。都市部は完全に社会民主党が制することになった。また前年の州議会選挙では得票率23.8%、11議席（全60議席中）を獲得し、社会民主党は、中央党、自由主義諸党（1912年、エルザス進歩党）と共に三大政党システムの重要な一翼を担った<sup>11)</sup>。

社会民主党のエルザスでの成功は、ドイツ全国での同党の成功の中で理解されるべきである。エルザスにおいても形成され始めた労働者階級にとって、社会主義こそ資本主義の諸悪を除去し、労働者の生活条件を改善し、自由と平和を保障すると考えられた。さらに協同組合等、労働者の福利を図る組織の整備によって、労働者は社会民主党の組織に組み入れられた。

もちろん、エルザスとロートリンゲンにおける社会民主党の発展には、なお独裁条項の存続によって、ドイツの他の地方に比べて、困難な条件を克服せねばならなかった。社会民主党の宣伝活動の最強の武器であった機関紙は、エルザス・ロートリンゲンでは1898年まで発行できなかった。ようやく、1898年になって“Freie Presse”が日刊の機関紙として発行を開始した。ミュルハウゼンでは、1902年から“Freie Presse für das Ober-Elsaß”が発刊された。後者は1904年に“Mülhauser Volkszeitung”と改称した。エルザスの社会民主党は二つの機関紙を持つに至った。

社会民主党の地方組織は、1905年のイエーナ党大会で改正された規約により、基礎単位として帝国議会の397の選挙区に合わせて選挙区連合（Wahlkreisverein）が置かれ、その上に県レベルの活動委員会（Bezirksagitationskomitee、または Agitationsbezirksorganisation）が置かれた。この県委員会には中央の党幹部会（Parteivorstand）から1名の有給の専従書記が配置され、県委員会の組織と活動について党幹部会に報告した。このような党組織の中央集権化に対して、南ドイツ諸邦国の支部は地方分権的な組織方式を要求し、エルザス・ロートリンゲンの社会民主党の組織においても、党幹部会と県委員会の間に邦国会議（Landesversammlung）が置かれ、7名から成る邦国幹部会（Landesvorstand）を選出した。幹部会議長（支部長）は、1906年から1918年までエルザス人ペロト Jacques Peirotes がつとめた。ベルリンの党幹部会が任命する有給の専従書記は、1908年から1910年までザクセン出身のドイツ人クナウフ H. Knauf、1910年から1914年まではエルザス人ヒューバー Charles Hueber がつとめた<sup>12)</sup>。

このように、20世紀に入ってから、社会民主党はエルザスで急速に勢力を拡大し、確固たる基盤を築き上げるのに成功した。しかしそれでも、ドイツ全体から見れば、まだ党员数は少な

かったと言える。1911年に党費を納入した党員は約5000人であり、社会民主党全体(約100万人)の0.5%に過ぎない。エルザス・ロートリンゲンの人口はドイツの全人口の3%を占めていたのであるが<sup>(43)</sup>。

### 第3節 社会民主党の「民族的」性格

社会民主党は、基本的にはドイツ人の党であったと言える。エルザスの三大政党のうち、中央党はエルザス人が多く、自由主義者はドイツ人が多かった。社会民主党のドイツ的性格は社会主義者鎮圧法を含めて社会民主党の最も重要な活動であった各種議会の選挙活動において、優先的に候補者となったのはまず第一にドイツ人であったことに現われている。エルザス最初の帝国議会選挙の候補者がベーベルやリープクネヒトであったことは既に述べた。1912年の戦前最後の選挙で、社会民主党は、エルザス・ロートリンゲンの15議席のうち5議席を獲得したが、そのうち、三人がドイツ人(ベーレ Bernhard Böhle, エメル Leopold Emmel, フックス Richard Friedrich Fuchs)、エルザス人は二人だった(ペロトとヴァイル Georges Weill。但し、ヴァイルはユダヤ人)。その前年1911年の州議会選挙に当選した11名の中でも、ドイツ人の方が多かった。

確かにエルザス最初の社会民主党帝国議会議員となったヒッケルはエルザス人であり、次の当選者ビューブもエルザス人であった。しかし彼らはベルリンの党中央からは信用されておらず、その親フランス的態度ゆえに間もなく議員職を追われた<sup>(44)</sup>。独裁条項が存続している間に、実権を握ったのは党中央から任命された信任者(Vertrauensmann)であり、エルザスでは、下エルザス県の信任者にライン対岸バーデン出身のベーレ、上エルザス県の信任者にロートリンゲンに隣接するザール地方(プロイセン邦ライン州)出身のエメルが任命され、いずれもドイツ人だった。当時、エルザスに限らず、ドイツ各地の社会民主党組織は、その日常的な活動において、特に機関紙の発行に関して、財政的にベルリンに大きく依存していたが、エルザスでは、ベルリンとの関係において、ドイツ人对エルザス人という「民族的」区分が存在した。ドイツ人であるベーレとエメルは、シュトラスブルク都市部選挙区とミュルハウゼン選挙区という、社会民主党にとって議席獲得が最も有望な都市部選挙区の候補者になったのに対して、エルザス人ペロトは、エルザス・ロートリンゲンの社会民主党組織の頂点に立っておりながら、出身地のシュトラスブルク選挙区からは立候補できず、コルマル選挙区からの立候補であった。当選できたのは、ようやく1912年の最後の選挙においてであった。このようなドイツ人優遇と、ベルリンの党中央が持つ、エルザス人への不信任感、エルザス人の不満の種になったことは疑いない。

一般の党員・支持者について言えば、エルザス・ロートリンゲンには併合以来、多数のドイツ人が流入してきたが、工業化の進展とともに、労働者の移住が増大し(特に、ミュルハウゼンの繊維工業とロートリンゲンの鉄鋼業)、社会民主党の支持基盤となった<sup>(45)</sup>。これにより、社会民主党の「ドイツ」的性格は強まった。しかし、戦前において、ドイツ人对エルザス人の「民族的」対立が表面化することはなかった。社会民主党のイデオロギーである社会主義は、少なくとも建前としては、「民族」を越えたインタナショナルイズムの立場を取っていた。

#### 注

1. マルクス『フランスの内乱』岩波文庫、19-46頁。

2. ベーベルとリープクネヒトは、独仏戦争には反対であったが、7月の第1回戦時公債案には棄権した。第一インタナショナルの「第一宣言」の「防衛戦争」規定が彼らの行動に影響を与えたと思われる。一方、党首シュヴァイツァー（Johann Baptist von Schweitzer）らラザール派の3名の議員は賛成投票した。11月の第2回戦時公債案にはラザール派議員も反対投票した。参照、Miller / Potthoff, *Kleine Geschichte der SPD*, S. 44；安世舟『ドイツ社会民主党史序説』, 35-36頁。
3. *Das Elsass 1870-1932*, Bd. 1, S.57.
4. Hiery, *Reichstagswahlen*, S. 154.
5. ドイツ語の全文は、*Das Elsass*, Bd. 4, S. 291, Dok. Nr. 9A.
6. Léon Strauss, "Le socialisme", *Jacques Peirotes 1869-1935*, p. 68.
7. Hiery, S. 85.
8. 参照, *Das Elsass*, Bd. 2, S. 87f.
9. Hiery, S. 86-89.
10. 拙稿「ドイツ第二帝政期のエルザス自治運動」(二)
11. 帝国議会・州議会選挙の結果については、*Das Elsass*, Bd. 4, 及び Hiery, *Reichstagswahlen im Reichsland* を参照。
12. *Jacques Peirotes 1869-1935*, p. 38-41.
13. Strauss, p. 69.
14. Strauss, p. 69；Hiery, S. 91.
15. Hiery, S.51-54.

## 第2章 社会民主党とエルザス問題

### 第1節 第一次大戦以前のエルザス問題

既述のように、ベーベルとリープクネヒトはエルザスとロートリンゲンのフランスへの返還を要求し、フランスとの和解を呼びかけた。しかしこの明確な併合反対、そしてフランスへの返還要求の立場は、その後徐々に後退する。

フランスへの早期復帰の見通しが小さくなるにつれて、エルザスの世論全体で、ドイツ支配を前提とした上で、ドイツ帝国の枠内での地位の改善を求める声が強くなった。つまり、「帝国領土」の地位から脱して、プロイセンやバイエルンと対等の権利を持つ、完全な連邦邦国の地位を手に入れることが政治的目的となった。ドイツの枠内での完全な自治権（主権国家の連合体としてのドイツ帝国の性格を考えると、これを「自治権」と呼ぶべきかについては若干異論が残るかもしれない）の獲得の要求を、社会民主党はエルザスの他のほとんどすべての政治勢力と同様、「エルザス・ロートリンゲンをエルザス・ロートリンゲン人の手に(Elsaß-Lothringen den Elsaß-Lothringern)」というスローガンで表現した。その意味するところは、主にプロイセン、バイエルン、バーデンからの移住ドイツ人によって、エルザス・ロートリンゲンの政府及び行政機関の重要ポストが独占されているという現状を改め、政治的決定権をエルザス・ロートリンゲン人自身が握ろうとするものである。統治形態としては、他のドイツ諸国のような君主制を取らず、かつて共和制フランスの一部であったという歴史的経緯から、「エルザス・ロートリンゲン共和国」が追求された。

社会民主党の立場が、もはやフランスへの返還を要求せず、むしろそれに反対の立場を取っているのが明らかになったのは、1911年の州議会選挙の際である。社会民主党は、カトリック神父でジャーナリストのヴェタレ Emile Wetterlé やコルマル市長ブルーメンタール Daniel Blumenthal らが結成した政党横断的な親仏派ナショナリスト政党「国民同盟 Nationalbund」

を激しく攻撃し、ドイツ人が多い自由主義者、官僚と共同戦線を張った。この共同戦線は成功し、国民同盟は惨敗した<sup>(1)</sup>。ドイツ当局＝エルザス・ロートリンゲン政府（1908年に地元出身者のブーラッハ Hugo Zorn von Bulach が初めて政府の首班に就任し、比較的的自由主義的な総督ヴェーデル Karl Graf von Wedel とコンビを組んでいた）は、もはや「民族的」にも「社会的」にも「革命的」でなくなった社会民主党を、エルザスの「ゲルマン化」の道具として好意的に遇するようになっていた。エルザスの社会民主党は、かつての抵抗主義的アウトサイダーから脱して、完全に体制化していた。

第一次世界大戦の前夜、ドイツとフランスの間で緊張が高まると、社会民主党はエルザスが新たな戦争の火種となることに反対し、また社会保障制度の遅れを理由にフランスへの復帰に反対した。1913年春、社会民主党はフランス社会党に対して、エルザス・ロートリンゲンのために死体の山を作るよりは、外国の一地方として認めよと要求した。それがエルザス・ロートリンゲンを愛することだ、と。1913年のイエーナ党大会で、エルザス・ロートリンゲンの代議員は、完全な共和主義的自治、連邦邦国としての完全な同権、立法・行政の自由主義的・民主的改革を要求する決議案を提出し、採択された。1914年7月、フランス社会党はイエーナ党大会の決議を承認した<sup>(2)</sup>。

大戦中にフランスに亡命し、ペロトとともに社会民主党の中の親仏派勢力を代表したヴァイルでさえ、1913年には機関紙“Freie Presse”の中で「エルザス・ロートリンゲン問題は、民主化と社会政策に関する我々の正当な要求が満たされるならば、解決される」と書いていた<sup>(3)</sup>。社会民主党は、エルザス・ロートリンゲンのすべての政党と同様、第一次世界大戦前夜において、フランスへの復帰の要求を取り下げていた。もちろん、ペロトのようなエルザス人は、フランスへの復帰を公然と要求しても、その実現の現実的可能性が小さく、さらに政治的に危険であるという理由から、親フランス的感情を抑えてドイツ帝国の枠組みを承認したのであるが、ドイツ帝国の枠内でも既に獲得した自治権をさらに一層拡大できると期待した点では誰もが一致していたであろう。

## 第2節 第一次世界大戦中のエルザス問題

第一次世界大戦は、エルザス問題に対する社会民主党内部の対立、即ちドイツ人とエルザス人の対立を表面化させた。それは「民族」的対立と言ってよい。

大戦勃発後、1914年8月4日、エルザス選出の4名の社会民主党所属の帝国議會議員（ロートリンゲン選出で、開戦時にパリにいたヴァイルを除く）は全員、戦時公債に賛成投票した。ペロトは8月3日の社会民主党議員団総会では反対したが、4日の本会議ではカール・リープクネヒト Karl Liebknecht らと同様に賛成投票した。戦争勃発直後、エルザスではドイツの他の地方で見られたような熱狂的な愛国的興奮は見られなかったが、それでもシュトラズブルクでは祭りの時のように旗が翻り、「ラインの守り」の歌が歌われ、通りや広場や飲み屋は人々で朝まで賑わった。エルザス南部の上エルザス県の国境地区で一部兵役拒否はあったものの、全体として大多数のエルザス住民は動員令に応じ、多くの若者が志願した。ドイツ軍司令官は、エルザス人は戦争体験を通じてドイツ国民と一体化した、と述べた<sup>(4)</sup>。

しかしやがて、エルザス社会民主党の内部で緊張と対立が生じた。第一に、開戦直後にフランス軍の侵入を受けた上エルザス（エルザス南部）で、フランスに対する態度をめぐって、上エルザス県連の内部で。そして第二にドイツの敗戦が決定的となった戦争末期に、エルザスの

帰属をめぐるドイツ人とエルザス人の対立。いずれも、ドイツの他の地方には見られない、エルザスの党独特の現象である。

このうち、前者については、ミュルハウゼン県委員会のエメルと“Mülhauser Volkzeitung”編集長のマルティン Jean Martin の対立がある。エメルとマルティンは第一次大戦前はともに「ラディカルなミュルハウゼン人」として、ペロトやベーレなど「修正主義的なシュトラスブルク人」と対立していた「同志」だったが、大戦の勃発が二人を仲たがいがさせた。開戦直後にミュルハウゼンが一時的にフランス軍によって占領された時、マルティンはこれを歓迎し、ヴィキー Auguste Wicky とともにエメルを「戦争社会主義者」として市会議員団から解任した。怒ったエメルは、ベルリンの党幹部会にマルティン、ヴィキーらの「ヴァイル型のフランス・ナショナリズム」を密告した。マルティンは“Mülhauser Volkszeitung”の編集長を解任され、1915年7月「反ドイツ的傾向」ゆえに懲役3カ月の有罪判決を受けた。釈放後もドイツ国内に軟禁された。この事件は、エルザス出身者のエメルに対する強い不信感を生んだ。1918年11月のドイツ敗戦後、マルティンはエメルに対して復讐することになる<sup>(5)</sup>。エメルは“Mülhauser Volkszeitung”を支配し、エルザス・ロートリンゲンの割譲という対価を払っての講和に反対した。これに対してエルザス人であるペロトは非常に用心深く行動し、親フランス的発言や行動を差し控えていた。

国外にいた社会民主党指導者の中では、上述のメッツ選出の帝国議会議員のヴァイルが明確に親フランス的立場を取った。彼はフランス軍に志願して、フランスへの忠誠を表明した。ヴァイルは開戦直前にフランスに亡命した神父ヴェタレらとともに1915年に設置された「アルザス・ロレーヌ会議 (Conférence d'Alsace-Lorraine)」のメンバーとなり、戦後のフランスのエルザス政策に大きな影響を与えた。エルザスの将来について彼はフランス社会党と同様、帰属を問う住民投票に反対し、フランスへの「単純明快な」復帰を主張した<sup>(6)</sup>。

ヴァイルと同じく『ユマニテ』で働いていたグルンバッハ Salomon Grumbach は大戦中スイスに滞在し、小冊子『エルザス・ロートリンゲンの運命』(1915年)の中で、住民自身に帰属を決めさせる住民投票を要求した。

ドイツ社会民主党全体では、戦争の長期化とともに、戦争の性格や政府への協力問題をめぐって、やがて多数派と独立派の分裂を招くことになるが、エルザスの党内では、それほど目立った対立は生じなかった。とはいえ、1914年12月2日の第2回戦時公債投票に先立つ議員団総会ではペロトの他に、エメルも戦時公債に反対し、ベーレとフックスは賛成した。しかし前回同様、本会議では党の規則に従って全員賛成投票した。この後、第3回戦時公債と予算案(1915年3月20日)、第4回戦時公債(1915年8月20日)では、ペロト、エメル、フックスが議場からの退場=棄権という行動を取った。第5回戦時公債(1915年12月21日)では、一挙に20名が本会議で反対投票、22名が投票を棄権したが、それに先立って発表された反対派の声明の33名の署名者の中にエメルとフックスの名前を見出すことができる。ペロトはこの中に含まれず、多分棄権という形での反対の意志表示に留めたのであろう。しかし1916年3月のいわゆる「緊急予算」に反対し、議員団から除名された「社会民主党協同団」の中に、エルザス選出の4人の社会民主党議員の名前はない。ベーレは常に戦時公債に賛成し、ペロト、エメル、フックスは反対の意志表示はしたものの、後に独立社会民主党に加わることもなかった。路線的にはベーレとペロトが党内右派、フックスが中間派に属し、エメルは左派に近いと言われるが、「社会」問題と「民族」問題が重なり合うエルザスでは、個々の議員の投票行動は単純でなく、複雑に

ならざるを得ない<sup>(7)</sup>。

ペーレを除く3名の議員の行動には、エルザスの独特の事情が大きく影響を与えていると推測される。彼らは党を割っても信念を貫くというほど、党指導部との路線の違いは大きくなかったであろう。彼らが独立派と一見同一行動を取ったのは、エルザス人であるペロトはもちろんのこと、ドイツ人であるエメル、フックスとしても、フランスと特別な関係を持つエルザスの、ドイツの他の地方とは非常に異なる世論を考慮に入れねばならなかったであろう。即ち、戦争勃発直後に軍政下に置かれたエルザスでは、国境地方ゆえにフランス軍の侵入を受け、その結果、1914年8月15日にブルツヴァイラー Burzweiler で起きたような、住民にドイツに対する大きな不信と恨みを与える事件が起きていたのである<sup>(8)</sup>。エルザス選出の社会民主党議員は、軍国主義と戦争に反対してきた平和の党の一員として、住民の反ドイツ軍感情を考慮に入れねばならなかった。ちなみに、社会民主党以外のブルジョワ政党の議員は、戦時公債に反対の行動は取らず、ドイツ政府への協力の姿勢を続けた。このことは後における革命において社会民主党が主導権を握る道義的根拠の一つとなっただろう。

### 第3節 1917年のヴェルツブルク党大会

ドイツ社会民主党は、第一次大戦中にエルザス問題にどのような態度を取ったか。1917年9月、独立派が分かれた後に、ヴェルツブルクで開かれた党大会で、エルザス・ロートリンゲン問題が議論された。以下、そこでの議論を見よう。

党幹部会の報告では、同年8月にストックホルムで開かれた、第二インタナショナル事務局主催の「国際社会主義平和会議」でのドイツ社会民主党代表団の声明が引用された。この声明はまず、エルザス・ロートリンゲンがかつて歴史上一度も独立の民族的国家 (selbständiges nationales Staatswesen) を形成したことはないこと、そしてその住民をドイツ国内の少数民族 (Nationalität) とみなすことができないことを指摘して、次のように述べる。

“Seiner ethnographischen Natur nach, das heißt nach Abstammung und Sprache ist die Bewohnerschaft Elsaß-Lothringens zu beinahe neun Zehnteln deutscher Nationalität. Nur 11,4 Proz. der Bevölkerung sprechen französisch als Muttersprache.”<sup>(9)</sup>

ここでは、血統と並んで、主に住民の大多数の母語がドイツ語であることを根拠に、エルザス・ロートリンゲンはドイツ民族の一部であるとみなされており、帰属意識などの主観的要因を問題としない、19世紀以来のドイツ的な、そして常識的な民族観を示している。さらに言えば、「エスニック」と「ナショナル」の両概念は同一のものにとらえられている。

フランスの主張するエルザス・ロートリンゲン領有の歴史的根拠については、それが「暴力による併合」であったとして、次のように否認する。

“Die ursprünglich staatsrechtlich wie ethnographisch zu Deutschland gehörigen elsäß-lothringischen Gebiete sind neben anderen Gebieten von Frankreich seinerzeit auf dem Wege gewaltsamer Annexion aus dem Verbands des Deutschen Reiches herausgerissen worden. Durch den Frankfurter Frieden 1871 erhielten sie die ursprüngliche Staatszugehörigkeit wieder.”<sup>(10)</sup>

そしてロシアのペトログラード労働者・兵士評議会の提案した「無併合・無償金の講和」に関連して、エルザス・ロートリンゲンのフランス返還を「暴力によって強制することは併合以外の何物でもなく」、従って「無併合の平和という原則に反する」と主張した。エルザス・ロー

トリンゲン問題の解決については、ドイツ帝国の枠内での他の連邦邦国との完全な同権を要求する、と従来の立場を繰り返し、それがエルザス・ロートリンゲンの党員の要望に合致していること、それには戦前にフランス社会党も賛成していたこと、そしてエルザス・ロートリンゲンの州議会のたび重なる意志表示とも一致することを述べ、あくまでもドイツ帝国の枠内での完全な自治という解決策の正当性を主張した。

声明は最後に、「無併合の講和という原則は、国境の修正に関する友好的な合意と矛盾するものではない」という言い回しで、場合によってはエルザス・ロートリンゲンのフランス語地域の割譲の可能性を示唆した<sup>41)</sup>。

党幹部会の報告を行ったエーベルト Friedrich Ebert は、フランス社会党が戦争勃発とともに従来の立場を変えたことを非難し、「この問題のための殺し合いを今後も続けることは社会主義の立場から正当化」されない、と報告を締めくくった<sup>42)</sup>。

党幹部会報告のエルザス問題に関する部分に対しては、7名が発言した。最初に発言したのは、Stralsund-Rügen 代表のカッツェンシュタイン Simon Katzenstein だった。彼は、エルザス・ロートリンゲンが「自由な共同体」(freies Gemeinwesen)としてドイツ帝国に加わっているのであるならば、それは「経済的にも精神的にも有益」であるが、しかし「それを決めるのは我々ではなく、エルザス・ロートリンゲン人民である」として、自決権を要求した。彼は、住民に自分で決めさせることが重要であり、それがドイツとフランスの和解にもつながると主張した。もちろん彼は、フランス語住民を除く圧倒的多数のドイツ語住民がドイツを選択することを期待してはいたが<sup>43)</sup>。

党幹部会からは、シャイデマン Philipp Scheidemann とヘルマン・ミュラー Hermann Müller が発言した。シャイデマンは、エルザス・ロートリンゲン人が特別の民族 (besondere Nation) ではないこと、エルザス・ロートリンゲンはドイツの土地 (Land) であるという、ほとんどすべてのドイツ人が共有する考えを表明した。そしてドイツの領土であるエルザス・ロートリンゲンの不可侵が、社会民主党の平和要求の一つであると述べた<sup>44)</sup>。ヘルマン・ミュラーはシャイデマンを支持し、カッツェンシュタインが要求するエルザス・ロートリンゲンの自決権＝住民投票はむしろドイツとフランスの敵対を激化させるだけだとして反対した<sup>45)</sup>。

これに対して Gießen-Nidda 代表のフェタース Friedrich Vettters は、シャイデマンがエルザス・ロートリンゲンの領土を一片たりとも渡さないと述べたことを批判し、フランス語地域をフランスに割譲することはあり得ると述べ、カッツェンシュタインと同様、エルザス・ロートリンゲン住民に帰属について自ら決めさせるべきだと主張した<sup>46)</sup>。

エルザス・ロートリンゲン代表の立場で発言したのは、ザール地方出身のドイツ人エメルである。党大会に出席したただ一人のエルザス人であり、エルザス・ロートリンゲン社会民主党の議長でもあるペロトは発言しなかった<sup>47)</sup>。またバーデン出身のドイツ人で、1918年11月の革命でペロトと主導権争いをするようになるベーレも発言しなかった。エメルはまず、「ドイツ帝国の枠内での自決権」には賛成であると述べる。しかし「ドイツ帝国の枠内での自決権」とは何か。自決権とは本来分離独立の権利を含むものであり、分離独立の権利抜きでの自決権というのは、形容矛盾であろう。エメルは分離権を認めない理由として「もしエルザス・ロートリンゲン人に自らの民族的帰属 (nationale Zugehörigkeit) について自ら決定する権利を与えるならば、ヘッセン人、オルデンブルク人、メクレンブルク人にも同じ権利を与えなければならなくなる」と述べ、これをばかげたこととして斥ける。そして「国の一部の国家的帰属について決

定するならば、この部分にだけ決定させるのではなく、その民族 (Volk) 全体に決定させなければならぬ。」とカツツェンシュタインの住民投票要求に反対した。

エメルは、既に述べたように、戦時公債には常に反対の態度を取り、戦前にも「ラディカルなミュルハウゼン人」として「修正主義的立場なシュトラスブルク人 (=ペーレ, ペロト)」と対立してきたが、第一次大戦勃発後は「ドイツ・ナショナリスト」の立場に移行し、エルザス・ロートリンゲン問題については、完全にドイツの立場に立っていた。しかし、とはいえ、エルザス選出の議員として、軍部独裁やブルツヴァイラー事件などが引き起こした住民の不満への配慮の必要性を指摘した。というのは住民が常に「無権利状態」に置かれ、「軍司令官に隷属」させられていること、「作戦地域にあるという理由で無慈悲で残忍な行為が正当化されている」ことを指摘し、社会民主党は戒厳令の撤廃を要求すべきであると述べた。「その時エルザス・ロートリンゲン住民の不満も消滅するだろう」と<sup>10</sup>。

エルザス選出の社会民主党議員たちは、ドイツ人であれ、エルザス人であれ、大戦中にエルザスでの軍による過酷な統治の緩和を請願する超党派の行動に参加し、軍部の暴力支配を非難した。中央党の議員でカトリック神父のヘーギーの召集に対しても抗議した。大戦中に計画されたエルザス・ロートリンゲンの分割・併合計画について、ヴェルツブルク党大会ではバイエルンへの併合にははっきりと反対の意見が出された。しかし、ドイツ社会民主党全体としては、ドイツ帝国の枠内でのエルザス・ロートリンゲンの自治という主張を最後まで変えなかった。フランスへの復帰を含めて住民に自決権を認めるべきだとする意見は、党内で少数派に留まった<sup>11</sup>。

## 注

1. 国民同盟については、*Das Elsass*, Bd, 2, S.172f., 180-182; Pierrri Zind, *Elsass-Lothingen Alsace-Lorraine. Une nation interdite 1870-1940*, Paris 1979, pp.38-39, François G. Dreyfus, *La vie politique en Alsace 1919-1936*, Paris 1969, p.13 を参照。
2. 参照, *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitagess der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands in Würzburg 1917*, Nachdruck, Berlin-Bonn-Bad Godeberg 1973, S. 41,241f.
3. Dreyfus, p.14.
4. *Das Elsass*, Bd. 1, 188.
5. *Der Republikaner*, Nr. 267 vom 30. 11. 1918 : J (ean) .M (artin) „Vive la France! Vive la République!“.
6. 「アルザス・ロレーヌ会議」については、参照, Dreyfus, pp.24-29.
7. 大戦中の戦時公債案、予算案に対するエルザス選出議員の投票行動については、参照, Eugen Prager, *Das Gebote der Stunde. Geschichte der USPD*, Nachdruck, Berlin-Bonn 1980 [初版は1921年], S.21ff.
8. ブルツヴァイラー事件その他については、参照, *Das Elsass*, Bd. 1, S.238ff.
9. *Protokoll 1917*, S. 41.
10. Ebenda.
11. Ebenda.
12. Ebenda, S. 241.
13. Ebenda, S. 263-265.
14. Ebenda, S. 277.
15. Ebenda, S. 294-296.
16. Ebenda, S. 288f.
17. 特にペロトはエルザスの党組織のトップの地位にありながら、そしてひそかに親フランス的感情

を抱いていたにもかかわらず、何ら自己主張を行わなかった。「非常に慎重に行動した」という評価もあるが、やはり結局は自己の保身のためであろうか。このことはエルザス人の労働組合指導者で州議会議員のインプス Eugen Imbs らの期待を裏切ることになる。インプスは1916年、匿名で小冊子 *Zwanzig Monate Weltkrieg und die Elsass-Lothringische Sozialdemokratie* を書き、その中で社会民主党は祖国防衛騒ぎ (Abwehrummel) に加わり、最悪の資本家たちと愛国主義の競争をしていると批判した。インプスはエルザス選出議員について、ペーレは常に戦時公債に賛成していること、エメル、ペロト、フックスは戦時公債には棄権はしているが、反戦の意志表示をする勇気がないことを批判した。特にペロトには期待していたのに、と。 *Das Elsass*, Band 2, S. 99.

18. *Protokoll 1917*, S. 355f.

19. 1917年4月に結成された独立社会民主党は、ストックホルム会議のために用意した宣言の中で、エルザス・ロートリンゲン問題について、その最終的な国家的帰属を決めるための住民投票を主張した。たとえ、その結果がドイツ国民の期待に反したとしても、即ちフランスへの復帰となったとしても、それによって得られるドイツとフランスの和解によって、「ドイツ国民は経済的、政治的、道義的に失うよりも得るところが多いだろう」と。Prager, S.151f. この宣言は党首ハーゼ Hugo Haase によって帝国議会で朗読されたが、印刷されることはなかった。なお、社会民主党の分裂は、エルザスの組織ではほとんど影響は認められない。このことは、大戦後エルザスがフランスに復帰した後、フランス社会党の支部となったエルザス社会民主党の大半の党員が1920年の分裂の際に共産党に移行したことを考えると、注目すべき現象である。

## おわりに

1918年8月、第一次世界大戦の戦況は大きく動き、ヒンデンブルク＝ルーデンドルフ指導部は、ドイツの敗戦を認め、ウィルソンの14カ条を基礎とする即時講和を政府に要求するに至った。これにより、エルザス問題は、国際問題となり、エルザスの情勢は急展開する。ドイツの敗戦、そしてドイツ革命により、社会民主党は思いがけず政権を獲得することになる。エルザスでも、他のドイツの諸地方と同様、労働者・兵士評議会が権力を握り、社会民主党は政府の一翼を担った。しかしエルザスでは、ドイツの他の地方には見られない独特の条件が存在した。即ち、かつてのエルザス・ロートリンゲン州議会が「国民評議会 (Nationalrat)」として、ロシアの二月革命後の「臨時政府」に相当する役割を演じようとしたこと、「ドイツ的」とみなされ、かつ急進的な兵士評議会に対抗する形で、労働者評議会がエルザス人社会民主主義者によって形成されたこと、エルザス・ロートリンゲン社会民主党議長のパロトが、シュトラスブルク市長として、また国民評議会の執行機関たる「行政委員会 (Verwaltungsausschuß)」の議長として、また労働者・兵士評議会の機関紙とされた“Freie Presse”の編集長として、事態が「ポリシェヴィキ」化しないように、また「中立論」によってエルザス・ロートリンゲンのフランス復帰が危うくされることのないよう、全力を挙げたことである。エルザスでは、エルザス人であるかドイツ人であるかが非常に大きな意味を持った。戦勝国としてのフランス軍の進駐を前にして、ペーレやエメルのようなドイツ人社会民主主義者は、エルザスを去った。しかし非常に短期間に終わった革命期においては、社会民主党の内部で、ドイツ人とエルザス人の間で、また革命の方向をめぐるエルザス人同士の間でも、なお綱引きがあった。この点については、別稿で論じる予定であるが、フランスへの復帰か、ドイツへの残留かについては、既に大戦勃発時には、社会民主党の内部で、ドイツ人とエルザス人の間で、決定的な溝が生まれていたことは、本稿で明らかにできたはずである。